Uehiro Research Div. for iPS Cell of Ethics

05

iPS細胞研究所（CiRA）［研究者紹介］

上廣倫理研究部門

Uehiro Research Div. for iPS Cell of Ethics

社会から信頼されるiPS細胞の臨床応用に向けて

日本国内ではiPS細胞を用いた世界初の臨床研究を端緒に、臨床応用に向けた研究活動がいよいよ本格化する節目の時期を迎えている。iPS細胞研究を迅速に進め、成功させるうえで社会からの信頼は不可欠である。そのために当研究室では、(1) 研究の進歩に伴って生じ得る生命倫理上の課題を明確化して対処策を提案することや、(2) 法令や指針に則った正当な手続き等によって研究が行われるよう研究倫理支援活動に参画することを目指している。

上.上廣倫理研究部門のメンバー
下.上廣倫理研究部門のウェブサイト

現場のニーズに沿った研究倫理支援体制の構築

本年度は、CiRAにおける臨床研究開始が間近なことを受け、研究倫理支援活動への参画を優先課題とした。まず、支援ニーズの有無やその内容、ニーズに応えるための知識・スキルの明確化を目的に、これまですでに研究倫理支援に携わっているCiRA内外の研究者や支援担当者、倫理委員会の関係者等へのヒアリングを行った。その結果を反映させ、現場のニーズに沿った支援体制の構築と支援の提供に着手した。支援体制の構築として具体的には、1) 現在計画されている臨床研究を実施するうえで必要となる知識やノウハウの共有と実践への活用、2) 研究支援に携わる関係者間でのネットワークの構築と強化を目指し、CiRA内外から研究支援に関わる関係者間でのワークショップを企画した。

生命倫理上の課題の明確化と対処案の提案

上記のヒアリングや当研究室内での議論の過程で、そもそも「研究倫理支援」とは誰が何をすることを指すのか、必ずしも明確化されていない可能性が示唆された。ここから、主に再生医療に関わる国内の施設にどのような支援体制があり、どういった支援を提供しているのか、現状把握と課題抽出する必要があると考えた。本年度は論点整理を行ったが、来年度以降は質問紙による実態調査を計画し、その結果を支援活動へと反映させていきたい。このほかの課題については、自由診療で幹細胞治療を提供する国内クリニックに関する報告（*Oxford Uehiro Center for Practical Ethics*, 2013）や、再生医療を用いたエンハンスメント議論に対する一考察（*J Med Ethics*, 2013）等についての発表を行った。

上廣倫理研究部門

部門長

藤田みさお准教授

1969年東京都生まれ。筑波大学第二学群人間学類卒業。帯津三敬病院、日本大学医学部附属板橋病院心療内科等で臨床心理士として勤務・研修後、2006年京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻博士課程修了。博士（社会健康医学）。2004年より東京大学大学院医学系研究科医療倫理学分野、特任研究員、特任助教、助教を経て2013年5月より現職。

mission

- 生命倫理上の課題の明確化と対処策の提案
- 研究倫理支援活動への参画

□研究スタッフ

●准教授
藤田みさお
八代嘉美

●研究員
鈴木美香

●秘書
桑原絵美

05 iPS細胞研究所（CiRA）［研究者紹介］

上廣倫理研究部門

Uehiro Research Div. for iPS Cell of Ethics

八代嘉美准教授

1976年愛知県名古屋市生まれ。名城大学薬学部卒業、東京大学医学系研究科病因・病理学専攻修了。慶應義塾大学医学部総合医科学研究センター特任助教、東京女子医科大学先端生命医科学研究所特任講師、慶應義塾大学医学部幹細胞情報室特任准教授を経て、2013年より現職。

mission

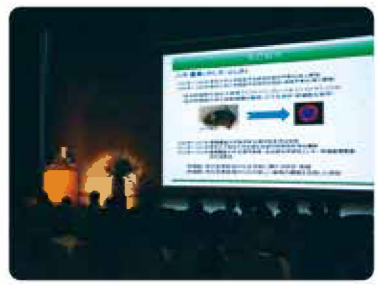
- 新しい生命観や倫理観創出に資する、幹細胞・再生医療研究の情報発信
- 意識調査やサブカルチャー研究を通じて、一般社会に内在する生命科学に対する意識の把握

再生医療研究の推進に向け社会の確かな理解を得るために

1961年にトロント大学のTillとMcCullochがはじめて「幹細胞」の存在を証明してから、その研究は急速な発展を続けている。20世紀には、身体のさまざまな組織に存在する体性幹細胞の確認にはじまり、受精後間もない胚から、身体を構成するさまざまな細胞へと分化するES細胞が樹立された。そして、2007年にヒトiPS細胞が樹立、2014年にはヒトiPS細胞由来の網膜細胞の移植が計画されており、幹細胞研究は新しい時代を迎えつつある。

そんな中で、幹細胞研究をはじめとする「再生医療研究」には、「万能細胞」、「究極の医療」という言葉がつきまとい、先端・専門の知識に接することが少ない人々や患者さんにとって、過大な期待や誤解を生みかねない状況にある。加えて、再生医療研究は生殖や疾患治療という観点から、生命倫理の議論の焦点でもあり、将来的には医療経済などの社会状況にも影響をおよぼす可能性が大きい。そうした観点から再生医療研究が社会の理解を得つつ推進されることの重要性が指摘されている。

一般向け書籍



上廣倫理研究部門開設記念シンポジウムでの講演

倫理的・法的・社会的課題を先取りし専門外の人々へ積極的に情報提供

再生医療が社会と調和した形で推進されるためには、再生医療の領域で浮上する可能性のある倫理的・法的・社会的課題（ELSI）を先取りし、専門家でない人々が簡潔に先端知識に触れる機会を積極的に提供する必要がある。そうした基盤を構築するため、これらの成果を用いて、テレビやラジオ、新聞といった既存のメディアのほか、インターネット媒体への執筆を通じて、再生医療研究の現状を積極的に発信してきた。また、これまで顧みられることの少なかったSF（サイエンス・フィクション）やマンガ、アニメといったサブカルチャー的な文脈を用いて、社会的な生命科学受容の像を探りつつ、「細胞の再プログラム」が可能となったポストiPS細胞社会の新しい価値観、生命観創出のための理論的研究を行い、文芸誌など幅広いメディアでの執筆を行っている。

□研究スタッフ

●准教授	●研究員	●秘書
藤田みさお	鈴木美香	桑原絵美
八代嘉美		